

「教育インターン」優良事例報告集

平成25年度 教育インターン小委員会
委員長 渡辺雅仁

必修科目<教育インターン>は、教育学研究科において「コア」となる科目です。この科目は、シラバスにも規定されているように「コア科目<教育デザイン>等の学習を多面的な教育の場において捉えなおし、それによって研究の深化を図る」ことを目的とし、「学生が自らの教育実践・研究の課題を持って現場（フィールド）に赴き、大学教員の指導ならびに現場の支援の下、実習（インターン）及び調査（リサーチ）」を行い、「インターン及びリサーチの結果は、大学のゼミや現場での討議を通して省察し、各自の研究に反映させる」科目です。平成23年度に組織改編を行った教育学研究科は、大学院運営委員会内部に「教育インターン小委員会」という組織を設置し、改編のいわば目玉として位置づけられるこの科目の運営を行ってきました。

小委員会は関連して、平成23年度と平成24年度に学生や教員を対象にアンケート調査を行い、その結果を平成24年度刊行の『教育デザイン研究』誌上において、「大学院教育学研究科<教育インターン>活動・指導状況についてのアンケート結果」という表題の報告としてまとめました。アンケートより、8割を超える学生が<教育インターン>に満足していることが明らかになりました。しかし、アンケートから、<教育デザイン>で十分な指導が行われた場合に、<教育インターン>の満足度がより高いことも合わせて明らかになりました。<教育インターン>の成果を高めるためには、コア科目<教育デザイン>の授業連動が欠かせません。

この<教育デザイン>については、シラバスにおいて「学校や地域・社会を含む多様な場での教育実践・活動を視野に入れつつ、問題関心と課題解決の見通しをもち、<教育インターン>などで検証をして、さらなる関心や見通しへと深め、修士論文への足がかりとする」のように、履修目標を設定し、「旧来の専門分野にこだわることなく、また教室での固定的な演習にとどまらず、必要に応じて関連ジャンルと往還させた情報交換や協働

作業・研究発表などを、担当教員の指導を受けつつ積極的に行う」のように授業方法が規定されています。しかし、その実際の形態や研究科の学びとの関連性については、専門領域や指導教員の裁量に拠る部分が大きく、<教育インターン>同様、十分に研究科内での共有が進んでいないのが実情です。

今年度は、それぞれの専門領域に依頼して<教育インターン>に関して優良事例と思われるものを選び、当該の学生から報告書を作成してもらい、『教育デザイン研究』誌上に掲載して、学生および教員の双方で共有することとしました。ほぼすべての専門領域から報告書が集まり、<教育インターン>の実態が浮かび上がってきました。

ただ、内容的には修士論文の概要に近いまとめに終わっている報告もいくつか見られます。今後の学生のインターン活動により役に立つような優良事例とは何か、報告書はどのように作成すべきか、検討を継続する必要性も見えてきました。

この報告書集が、研究科の設置目的にも記されている「教科別・ジャンル別の固定的な教育・研究のみではなく、現代社会に即応できる、あるいは近未来を見据えた、新しいスタイル・内容の横断的・総合的な授業などの<教育デザイン>を自ら主体的に創造し試みる」ことへと、学生と教員の双方が繋げていただければ幸いです。